

#### 第四章 ミニー・メイ

数週間後、マリラ、リンド夫人、そしてダイアナの両親はシャーロットタウンでの重要な会議に出かけます。

彼らは皆、その夜シャーロットタウンに泊まります。

アンはマシューと一緒に家にいます。

彼らは6時半に夕食を取り、その後アンは台所で宿題をします。

寒い冬の晩です。

突然、外で物音がして、ダイアナが台所へかけ込んできます。

ダイアナの顔は青ざめ、おびえています。

「アン、マシュー、お願い、私を助けて！」とダイアナは言います。

「ミニー・メイがひどい病気なの。彼女は高熱を出していて話すこともできないのよ！ 私の両親はシャーロットタウンに出かけて留守なの。きっと私の小さな妹は死んでしまうんだわ！ どうか私と一緒に来て」

「まあ、ダイアナ、かわいそうに」とアンは言います。

「でも心配しないで、私があなただけを助けられるわ。マリラは高熱に効く薬を持っているのよ。私はそれを取ってくるわね」

アンは2階にかけ上がり、薬の瓶を取ってきます。

マシューはコートを着て、「わしは医者を呼んでくるよ」と言います。

「どうか急いで、マシュー」とアンが言います。

アンはコートを着て、「さあ行きましょう、ダイアナ。マリラの薬はポケットの中にあるわ」と言います。

外は風の強い晩で、地面は雪に覆われています。

アンとダイアナはバリー家に向かって急いで歩きます。

そこへ到着すると、アンはミニー・メイに会いに行きます。

ミニー・メイはひどく具合が悪く、彼女の顔は赤くなっています。

「ミニー・メイはベッドに行かなくてはならないわ」とアンが言います。

アンとダイアナはミニー・メイの服を脱がせ、彼女をベッドに寝かせます。

それからアンはコートのポケットから薬の瓶を取り出し、いくらかをミニー・メイに与えます。

アンとダイアナは一晩中彼女のベッドのそばに座っています。

二人は心配しています。

長い夜の間、アンはミニー・メイにさらに薬を与えます。

「お医者さんはどこにいるのかしら？」と壁の時計を見ながらダイアナが尋ねます。

「分からないわ」とアンは言います。

「とても心配だわ」

朝早く、マシューが医者と一緒にやってきます。

「遅くなって申し訳ない」と医者が言います。

「多くの人が病気にかかっているからね、私にとって冬はとても忙しい季節なんだ」  
医者は入念にミニー・メイを診察し、そしてアンにほほ笑みます。

「ミニー・メイはもう具合がよくなっているね、君のおかげだ、アン！ 君はとても賢い女の子だ」

「ああ、ありがとう、アン」とダイアナが言います。

「あなたは素晴らしい友達だわ！ 私、両親が家に戻ったら伝えるわ」

「ミニー・メイの具合がよくなっていてうれしいわ」とアンは彼女の友達にほほ笑んで言います。

アンとマシューは朝早くに家へ帰ります。

アンはとても疲れているので、床に就きます。

アンが午後に目を覚ますと、マリラは「バリー夫人があなたに感謝したいそうよ！ ミニー・メイは今日は具合がいいのよ。それと、あなたはまたダイアナと遊んでいいとバリー夫人は言っているわ」と言います。

「わあ、素晴らしいわ！」とアンは喜んで言います。

「ダイアナは私の親友よ。今ダイアナに会いに行ってもいい？」

「ええ、いいわよ」とマリラが言います。

「私はあなたのことを誇りに思うわ、アン。さあ、温かいコートと帽子を身に着けるのよ、外は雪が降っているからね」

アンは外へかけて行きます、そしてとても幸せな少女です。